

⑤ 「わたしと尾瀬」

今後、どのように尾瀬と関わって行くかを考えるために、先人たちの足跡を辿ってみた。

●問題提起

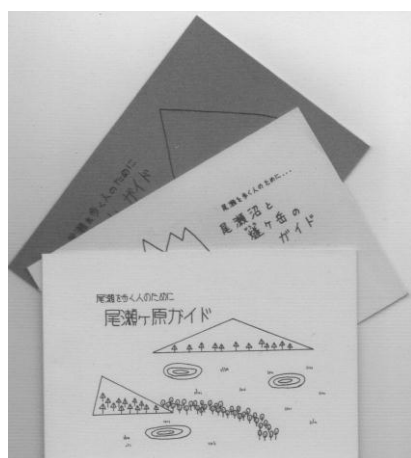
平野紀子（長蔵小屋）明治38年に武田久吉先生が「尾瀬紀行」を書き、それを讀んだ大下藤次郎が尾瀬の絵を描きに来られた。尾瀬を世に紹介した人として長蔵は尾瀬沼畔に早世した大下藤次郎の碑を、武田先生は生前に希望しておられたうちの墓地「ヤナギランの丘」に、長英が「追慕の碑」を建立して感謝の気持ちを表しました。うちの宿帳には日本山岳会の先輩方のお名前が殆ど残っています。尾瀬が変わったとは思いませんが、建造物看板、木道が増えて人工的になり過ぎたと思います。群馬と福島とを結ぶ三平峠も階段状になってしまいました。全て机上プランで予算がつき、工事が進められてきたためです。

東京電力が原発事故で尾瀬の管理費用が出せないと言っていますが、環境省も地元も東電を当てにしています。「あれだけ企業イメージをPRしたのだから、今後もするだろう」と。東電は発電のためには尾瀬の水を手放せない。どんな時代が来ても、長蔵の志をついで尾瀬で生きていけることを有難く思います。

福永栄（尾瀬自然観察会）最初に尾瀬に入ったのは1966年。71年に三平峠に道路が通ることに平野長靖さんが反対して直訴、大石長官が視察に来られて中止が決まった。そのことに刺激を受けて年に七、八回は通いました。70年代までの尾瀬は、湿原に入ったり、トランジスタラジオを鳴らしながら歩いたり、ゴミ箱の周りにゴミが散らかったりしていました。そんな中でも、湿原の回復とか、學術調査とかに取り組む人たちがいました。

20代の私たちに何ができるかと考えた結果、自然解説のための小さなガイドブックを作って山小屋に置いてもらうことにしました。行きはそれを背負って行き、帰りにはゴミを拾って持ち帰る、そんな活動が10年も続いたでしょうか。今は立派なビジターセンターが出来、自然解説も充実しています。今後も登山者が自然に親しめるよう最低限の費用は維持されることを願います。

大悟法雄作（歌人・大悟法利雄の子息）私の親父は、酒と旅の歌人と言われた若山牧水の弟子。生涯を牧水の顕彰のために過ごした。その関係を大岡信は「義経と弁慶のようだ」と書いています。牧水は「みなかみ紀行」で群馬を歩いていますが、尾瀬は知らなかった。親父は「歌人にならなかつたら登山家になり



「至仏岳ガイド」、「尾瀬沼、燧ヶ岳ガイド」
「尾瀬ヶ原ガイド」

たかった」という位の山好きで、昭和の初めから尾瀬にきていて、『尾瀬と九十九里』という歌集があります。平野長英さんは親父より少し年下でしたが、やはり短歌を作っていましたから、尾瀬の素晴らしさを詠うと同時に、長英さんに会うのを楽しみにしていました。純文学として尾瀬を紹介した最初と思います。

参加者から

○渡り鳥の飛来地、新浜を埋め立てることに反対する運動から自然保護に入った。当時は「人か鳥か」だったが、今は「人も尾瀬も」の時代だと思う。○尾瀬は綺麗だ。守っていきたい。○若いころ尾瀬で働いたことがある。尾瀬からヒマラヤへ。幸せな経験だった。

●司会 池田修平／渡邊嘉也 記録 恩田小夜子／近藤緑
（出席者32名）